

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2016.12) 平成28年度:17-18.

大腿骨付近位部骨折後のリハビリテーションへの意欲がもてない高齢者に対する看護一フォーカスグループインタビューを用いて一

里村 真寿美, 出村 唯

大腿骨近位部骨折後のリハビリテーションへの 意欲がもてない高齢者に対する看護 —フォーカスグループインタビューを用いて—

里村真寿美 出村唯
(指導：菊地まり子)

緒言

高齢者は、加齢による筋力低下や骨粗鬆症などの影響から、骨折を経験するケースが多い。骨折の中でも特に大腿骨近位部の骨折が高齢者に多く¹⁾、寝たきりの直接的な原因となる疾患であるため、受傷後の長期リハビリテーションが必要とされている²⁾。寝たきりは高齢者にとって、歩行能力低下だけではなく認知機能の低下を引き起こし、在宅復帰困難の要因となる。そのため、高齢者の大腿骨近位部骨折において、術後リハビリテーションは重要といえる。しかし、意欲的なリハビリテーションを行うにあたり、阻害する因子は多く存在する³⁾⁴⁾。リハビリテーション意欲に関する研究が多くある中で、意欲阻害因子に関する研究や、意欲のある患者に対する研究はされていたが、意欲がもてない患者に対する看護援助に関する研究はなかった。そこで、リハビリテーションに対して意欲がもてない患者に対する看護について、リハビリテーション専門医が勤務しており、リハビリテーション看護に力を入れて取り組んでいる病院の看護師にインタビューを行うことによって、リハビリテーションに対して意欲がもてない高齢者への看護援助の方法を明らかにする。

研究協力者

対象病院における勤務年数3年以上で、大腿骨近位部骨折をした高齢者を受け持った経験のある看護師5名。

調査方法及び調査内容

インタビューガイドを用いて、研究協力者にフォーカスグループインタビューを行った。面接はプライバシーが保たれる個室で行い、了承を得てICレコーダーに録音した。インタビュー内容は①リハビリテーション看護を行う際に大事にしていることは何か②リハビリテーションの必要性をどのように説明しているか③リハビリテーションに意欲的でない高齢者に対してどのような看護援助をおこなったか④高齢者のリハビリテーション意欲の向上に成功した例、失敗した例。それに対する対応はどのようなものか、とした。

データ分析方法

インタビュー内容を逐語化し、リハビリテーション意欲向上のための看護に関連する部分を抽出した。内容が損なわれないよう文脈を整理し、コードを作成した。次に意味内容を類似するものに分類し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。分析は、研究者間で合意が得られるまで討議を重ねた。

倫理的配慮

本研究は、倫理審査委員会による承認を得て実施した。(承認番号16038) 研究協力者に対しては研究目的・方法とプライバシー厳守について口頭及び書面で説明し、同意を得た。

用語の定義

大腿骨近位部骨折：骨頭骨折、骨頭下を含む頸部骨折、頸基部骨折、転子部骨折、転子下骨折のうち、いずれかの部位の骨折

リハビリテーション：骨折による自立歩行困難の障害を取り除くための運動機能訓練及び日常生活動作

セラピスト：理学療法士、作業療法士、言語聴覚士

結果

リハビリテーションに意欲がもてない高齢者への看護援助の方法に関して、46のサブカテゴリー、12のカテゴリーを抽出した。(表1)

カテゴリーは【患者の気持ちに寄り添って看護をする】【個々の患者の目標に向けた看護を行う】

【患者の個別性を踏まえた関わりをする】【入院期間すべてがリハビリという認識を持ってもらう】【他職種との協働によって患者の全体像を捉える】【意欲向上のための看護を行う】【受傷前と受傷後の変化の受け入れ】【看護師に依存的な部分がある】【退院先により自立度は異なる】【リハビリテーション拒否には様々な理由がある】【患者同士の情報共有はリハビリテーション意欲向上につながる】【入院中の生活すべてがリハビリテーションである】が抽出された。

(表1)

カテゴリー	サブカテゴリー
患者の気持ちに寄り添って看護をする	患者との関わりの中で、気持ちの表出を促し、傾聴する
	患者の気持ちに合わせたリハビリテーション看護を行う
	リハビリテーションの進行度と意欲を合わせる
	患者のニーズを捉え、リハビリ看護を行う
	患者に離床意欲があるタイミングで離床を促す 気分転換を促す 身体面だけでなく精神面も見る
個々の患者の目標に向けた看護を行う	退院後の生活を視野に入れた看護を行う
	目標の設定、理解、共有が重要
	患者が持っている受傷前の自己の身体的イメージと実際の受傷後の身体状況を明確にする
	日々の看護実践の評価が重要
	患者の自立度に合わせた看護を行う
患者の個性を踏まえた関わりをする	趣味をリハビリテーションに取り入れる
	患者の個性に合わせた看護を行う
	生活背景を明らかにする
	生活背景を踏まえたリハビリテーションを行う
入院期間すべてがリハビリという認識を持ってもらう	入院期間すべてがリハビリテーションである認識を持ってもらう
他職種との協働によって患者の全体像を捉える	患者の状態に合わせたリハビリテーションを他職種と調整する
	多職種間で情報共有をする
	職種間での患者認識を統一させる
	他職種の情報を活用してリハビリテーション看護を行う
	セラピストと看護師の患者像に差が生じることがある
	看護師が介入可能な拒否理由であれば介入する 認知機能の低下予防をする
意欲向上のための看護を行う	リハビリテーション意欲が持てない原因を考察する
	リハビリテーション意欲向上のための関わりをする
	意欲向上のためのリハビリテーション看護を積極的に実践する 医療者は患者に対して支持的に関わる 受傷前の身体的イメージは強く残る
受傷前と受傷後の変化の受け入れ	受傷前の身体能力に戻りたい気持ちが強いほど、受傷後の身体能力と患者の目標とに差が生じやすい
	身体能力は心理面に影響する
	失敗体験は負の循環につながる
看護師に依存的な部分がある	患者の行動に対する看護師の反応はリハビリテーション意欲に影響する
	持っている能力と実際に行っている能力は異なる
	看護師には依存的になる傾向がある
退院先により自立度は異なる	退院先により求められる自立度は異なる
	スタッフによって態度が変わる患者もいる 日によってリハビリテーション意欲は異なる 患者によってリハビリテーション内容の好みも異なる
リハビリテーション拒否には様々な理由がある	痛みはリハビリテーション意欲に影響する
	リハビリテーションの拒否には必ず理由がある
	患者と家族のリハビリテーションの目標が異なっていれば患者のリハビリテーション意欲は出てこない
	意欲向上のために患者と家族の想いは重要
	リハビリテーション拒否の原因にアプローチしても意欲が向上しない時もある
患者同士の情報共有はリハビリテーション意欲向上につながる	患者同士の情報共有はリハビリテーション意欲の向上につながる
入院中の生活すべてがリハビリテーションである	入院期間すべてがリハビリテーション

考察

患者がリハビリテーションを拒否する理由は共通したものではなく、患者によって異なる。患者一人一人の全体像を的確に捉えることによって、リハビリテーション意欲が向上しない原因が明らかとなり、アプローチ方法を検討することができる。

原らは、リハビリ意欲阻害因子に対して看護師は「患者の気持ちを理解し力になりたいという気持ちを表す事が必要⁴⁾と述べていた。患者の気持ちに寄り添いながらリハビリテーションを進めていくことが重要だという部分が共通していた。しかし、患者のリハビリテーション意欲向上のための看護援助において以下のことも重要であることが明らかとなった。患者一人一人の目標を明確にし、リハビリテーションはそれに合致したも

のかを考えながら関わること、リハビリテーション拒否の原因を考える際には、患者の意思や生活背景を尊重し、リハビリテーション内容を工夫することで意欲が向上することである。そして、患者はセラピストとのリハビリテーションの時間だけが機能訓練の場であると考えられる傾向があるので、入院期間すべてがリハビリテーションであるという認識を持ってもらうように援助していくことも重要である。さらに、看護師だけが意欲が向上しない原因を考えるのではなく、医師やセラピストなどの他職種と情報共有を図ることによって、医療者全員がその患者の全体像を把握し、患者一人一人に適したリハビリテーションを提供することができる。そして最も重要と考えられることは、患者のリハビリテーション意欲を向上させるための看護援助を一度検討し、実践しても、すぐに向上させることは難しいということである。看護師は、一人一人に対してなぜ意欲が向上しないかを日々深く追求し続けながら看護を提供する必要がある。その中で、一つの方法を実践し、意欲が向上しなくとも、医療者が意欲向上を諦めてはならない。患者がリハビリテーションを拒否する理由をすぐに把握することは困難であるからこそ、様々な援助を検討・実践・評価することを繰り返すことによって、その人にとって最良のリハビリテーション意欲向上のための看護援助を見出すことができると考える。

研究の限界

リハビリテーション看護について語ってもらうことによってリハビリテーション意欲向上のための看護援助を検討することはできたが、大腿骨近位部骨折を経験した高齢者に対する看護に限定することができなかった。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 細野昇: JNN スペシャル これだけは知っておきたい整形外科, 92, 医学書院, 2012, 東京.
- 2) 寺山圭一郎, 新野直明: 急性期病院における術後高齢大腿骨近位部骨折患者の自宅退院に関連する要因, 日本応用老年学会, 8(1), 54-61, 2014.
- 3) 貝塚みどり, 大森武子, 江藤文夫他: QOL を高めるリハビリテーション看護学, 63, 医歯薬出版会, 2006, 東京.
- 4) 原亜由美, 斎藤正美, 小林宏美他: 大腿骨頸部骨折患者のリハビリテーションに対する意欲の促進と阻害要因. 日本看護学会論文集 成人看護 I. 1(42). 150-153. 2012.